

# 扉の向こうへ

熊本の支援センターを訪ねて上

全国の自治体で続々と設置されている「ひきこもり地域支援センター」。ひきこもりに特化した窓口を設けることで支援体制の強化が期待されるが、山梨県内では開設の動きはない。一方、昨年、今年と相次いで支援センターを開設したのが熊本。市と県が、ひきこもり当事者の社会復帰に向けた活動に取り組んでいる。施設の役割と意義を探ろうと、現地を訪ねた。

〈木下澄香〉

人口約70万、2012年福祉センター「ウェルバル」に政令市になった熊本市。くまもと」のビルがある。中心を路面電車が走る大通。昨年10月、ビル3階に開設の道沿いに、市総合保健されたのが、熊本市ひきこ



NPO法人「おーさあ」の職員として働く、ひきこもり経験者の赤星講平さん。同NPOはサポステと支援センターを連携させ、「支援の連続性」を図っている  
＝熊本市内

山梨発 ひきこもりを考える

もるように。父親の知人の紹介をきっかけに、県の精神保健福祉センターから、就労を支援する市の地域若者サポートステーション（サポステ）に通うようになった。気持ちはなかなか上向かなかったが、スタッフの支えを受け、時間をかけて今の職に就いた。

## 開設半年で200人

「おーさあ」は支援センターより前に、2007年から市のサポステの運営を受託。多い時で年間延べ6千人が利用するサポステで長年支援に携わり、現在は支援センター所

## 出て行ける場所

支援センターとサポステを連携させ、息の長い効果的な支援を可能にする。大事なのは支援の連続性」と語る伊津野さん。「サポステだけではひきこもりは解決しない。いきなり就労を求めることのない施設があることで、当事者がまず支える側と結びつくことができる」と支援センターの存在意義を強調する。支援される立場から支援する立場へ。赤星さんは現在、キャリアアカウンセラの資格取得を目指して勉強を続けている。「ひきこもりの当事者にとって状態や環境に応じて、サポステや支援センターなど『出て行ける場所』が用意されているのはありがたい」

# 息の長いサポート構築

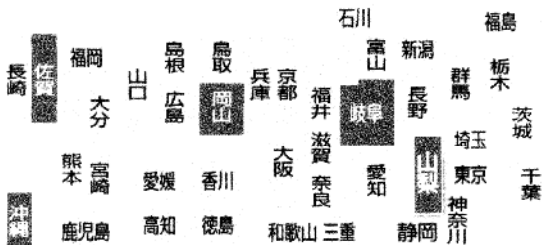
援を行っている。

仕事だ。

同市の赤星講平さん(32)は約3年間のひきこもり生活を経て、昨年から同センターを運営するNPO法人「おーさあ」の職員として働いている。支援センター

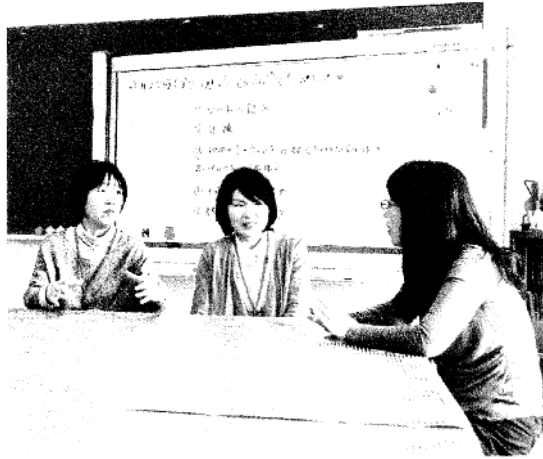
## 「ひきこもり地域支援センター」設置状況

- 2014年度までに都道府県単位で設置済み
- 2015年度中に都道府県単位で設置(予定含む)
- 2015年度中に都道府県単位で設置予定なし



# 扉の向こうへ

熊本の支援センターを訪ねて 下



熊本のひきこもり地域支援センターの業務内容について話し合うスタッフ  
＝熊本市東区

山梨発 ひきこもりを考える

## 県施設が市町村と協働

「いよいよですね。熊本には、支援のノウハウを備えている熊本市精神保健福祉センターの1室で、3人、女性スタッフの話し合っ

ていた。4月、同施設内にオープンしたばかりの「ひきこもり地域支援センター」が開設した、専用タイ

## 地域に集いの場つくる

「いよいよですね。熊本には、支援のノウハウを備えている熊本市精神保健福祉センターの1室で、3人、女性スタッフの話し合っ

ていた。4月、同施設内にオープンしたばかりの「ひきこもり地域支援センター」が開設した、専用タイ

### 深刻さを認識

熊本の支援センターは、熊本市以外の市町村の住民を